

社会科教育

奈良県小学校教科等研究会
社会科部会
第80号

第六十六回奈良県小学校社会科研究大会

令和元年十一月八日 鼓阪北小学校

指導講評
奈良県教育委員会事務局学校教育課
指導主事 谷 聡 先生

○三年生 春日 光先生

「店ではたらく人」
新学習指導要領では、生産に関わる仕事と、販売に関わる仕事の内容的にはつきりと分かれていると言えるでしょう。

例えば、生産の仕事では、仕事の種類や産地の分布に着目することが重要になります。生産の仕事は、地域の方々への生活に非常に密接な関わりをもっているというところを理解することが大切

です。販売の仕事については消費者の願い、販売の仕方、他の地域や外国との関わりなどに着目して、販売に携わっている人の仕事の様子を調べるのが重要です。そして、消費者の多様な願いを踏まえ、売り上げを高めるよう、工夫して行われていることを理解できるように指導します。販売の仕事の学習ではそれが中心概念となります。

今までは、中心概念を教員等が決めなければいけないケースもありました。しかし新学習指導要領の解説では、単元で最終的に学ばせなくてはならないゴールがきちんと描かれています。

県小社研で取り組んでこられた「みつめる」「しらべる」「ふかめる」「ひろげる」の四つの学習過程があります。その中の三つの学習過程で問いがありました。その三つ

の問いの答えを集めると、「お店は、消費者のニーズを踏まえながら、売り上げを高めるよう工夫をして営んでいるのだ」という中心概念につながる問いになっていました。だから授業がぶれなかったのだと思います。

子どもたちの発言を見ていると、例えば、A店では、平日にお客さんに来てもらうためにセールをしている。あるいは果物の詰め放題をしている。このようなミクロの具体的な事象が多く集まったものが中心概念になるわけです。この具体的な事象を飛ばして中心概念に迫ろうとしてはいけません。具体的な事象をたくさん集めた先に中心概念があるような学習過程を設定されたところがこの授業の中では大変素晴らしいところだと思います。

特に象徴的だったと言えるのが、あるお店では、詰め放題をしている。他のお店では、まとめて売っている。なぜ同じ地域に二つのお店があるのかと問うたところから、これを問うことによって、それぞれのお客さんのニーズが違うことに気付く、二つのお店が住み分けをしているということに近づけたのではないかと思います。

○六年生 宇都宮 健司先生
「新しい日本、平和な日本へ」
単元を貫く問いを、「なぜ、日本は戦後二〇年でオリンピックが開催できるほど復興できたのだろうか」としました。これは、前単元で学習した、「日本は先の戦争で

多大な被害を被った」ことから考えると意外な事実を提示し、追究させていきました。

ここで先生は、ただ「話し合いなさい」というわけではなく、国内の改革、外交、産業の三つの問いを追究する視点を明確にしていきました。そして、それぞれ個人が重きを置いた視点について調べ、習得した知識を持ち寄って、事実を関連付け、総合するというところがきちんとできていました。子どもの頭が一時間ほぼ思考し続けていたのではないのでしょうか。

先生はどうすれば子どもの思考が高まるかを考え、ホワイトボードを採用されたのだと思います。用語を先に配置して、矢印がどのような意味をもっているのかを考えさせながら関連図を作り、最終的に六年生が書ける言葉で約三行にまとめさせる。この思考のプロセスができていたからこそ、最後に発表させたときに、文章が最後まで書いていなかったのに、その場で言語化して自分の考えを話せたのだと思います。



谷 指導主事先生

実践される時には、その時間の学習課題に対する答え、また子ども達「こんなことを書くだろう(書いてほしい)」ということについてはきちんとおいてください。それを具体的な言葉で出力していただけると、評価する時に、子どもの記述を正しく評価できたり、到達していない子への手立てが自ずと見えたりしてくると思います。

学年別分科会での研究協議の概要

第3学年部会

「ふせこう、交通事故や事件」
「斑鳩安全マップを通して」
斑鳩町立斑鳩小学校

教諭 寺澤 学

「本実践における提案」

研究仮説を次のように設定した。「安全を守る様々な立場の人の思いや願いから学んだことをもとに、自分たちが住む町の安全について考え、何ができるかについて、見方・考え方を働かせながらねり合い、地域の安全を守るために、自分たちでできることを考えること」で、よりよい社会の形成に参画しようとする児童が育つ。

「みつめる」では、町の交通事故や事件の件数が減少していることから、学習問題を作成した。「しらべる」では、警察・地域のボランティアの方をゲストティーチャーで招き、話を聞いた。また、まとめとして安全マップを作成し、自分たちの安全に関わる営みや危険な場所を視覚的に捉えられるようにした。「ふかめる」では、安全マップ



分科会での提案の様子

の作成により交通事故が多いとわかった龍田大橋を取り上げ、「龍田大橋の事故を減らすためには、どのようなことができるのだろうか。」について、「警察」「地域」「役場」の立場に分類しながらねり合った。

「ひろげる」では、交通事故や事件を減らすために自分たちでできることを考えた。

この学習を通して、自分たちも含めて様々な人が協力して事故防止や防犯をしているという中心概念に迫ることができた。

【研究討議】

・ねり合いのテーマは、なぜこのように設定したのか。

↓児童が危険と考える場所で、事故の影響の大きい龍田大橋にした。ただ、キーワードを提示する等工夫したが、ねり合いが発表会のようになっちゃった。

・ひろがる段階の「自分たちでできること」は、どんな意見がでたか。↓左右の確認。自分より下の学年に声をかける。ポスターを貼る。(見ないのではという反論があった。)自転車ライト。役場の人に伝える。など。

・Y字チャートを活用した指導法について教えてほしい。

↓まとめとして活用した。三者を分けてまとめた後、関連しているところを矢印等でつないだ。

・Y字チャートの使い方が難しい。カテゴリの分け方を工夫すること、各機関の連携がより見えるのではないかと。ねり合いの問いが少し難しかった。話し合う必然性をどのように感じさせるかが大切だと感じた。

【指導助言】

平群町立平群小学校
校長 稲浦 聡先生

・4年生から3年生に降りてきた単元である。新学習指導要領では「防犯に関しては警察署、緊急対応に関しては消防で」というように重きを置いて学習する。また、自分たちにできることを考えられるようにすることが今回の実践で取り扱われていた。

・授業者に質問すると、「やって楽しかった。」という言葉が返ってきた。教材研究が楽しくないと、授業は楽しくならない。社会科は内容教科だからである。素材・教材集めをしなければならぬから出かけたくなったという言葉があったように、授業者に変化が見られたと考える。

・ねり合いに関しては、難しくかった。安全マップを作るタイミングをなぜ「しらべる」段階でしたのかが疑問であった。しかし、今回は安全マップがあったから、ねり合いの龍田大橋につながった。この流れの授業であれば、龍田大橋でよかった。しかし、児童が自分ごととして考えるには困難さがあった。

・人対車の事故であれば、高齢者が多い。そのような条件下で話し合うとより活発に話し合えたのではないかと。

・根拠を伴って話し合うことが大

切。それが今回実現できたのではないかと。

・個人↓グループ↓全体というのは、よくある流れである。グループの組み方は色々ある。どのように組むかは、教師の工夫である。その加減が難しい。

・指導案の中に目指す児童について記述されると良い。

・毎時間のふりかえりは効果的である。継続的にどのくらいの時間でどのようなことを書かせるのが大切。ノート指導を徹底することが左上にねらい、右下に三行のまとめを書かせることと良い。

・多彩なゲストと安全マップが本実践の良いところであった。

(大正小学校 宮城 修斗)

第4学年部会

「県内の特色ある地域のように」

―金魚のまち大和郡山市―

奈良市立済美小学校

教諭 木之下 昇平

「本実践における提案」

「みつめる」段階で、二つの活動を通して学習問題をもたせた。まず一つ目は、郡山市の現地見学を行い、児童に郡山市の特色を感じさせることとした。二つ目は、現地の4年生とのビデオ交流を行った。奈良市と郡山市の特色の違いを比較するためである。交流後の振り返りには、「郡山市はなぜ金魚のまちなのだろうか。」と学習問題をもつこととなった。

「しらべる」では、学習問題の解決のために何を調べなければいけないかを考えさせた。そして、子どもたちの興味とともに調べる内容を以下の4点に決定した。

- ・大和郡山市の金魚の歴史
- ・金魚の種類
- ・金魚はどのようにして育てられているのか
- ・金魚すくい大会について
- 「金魚はどのように育てているのか」という疑問については、分らないなかつたことを永井養魚場の永井宏幸さんに質問状でお聞きした。また「金魚すくい大会」については、大会創設に携わった金魚すくい名人・田村和勇さんに来ていただき、お話を伺うことにした。
- 「ふかめる」では、「郡山市の金魚産業はこれからどうなっていくのだろうか。」をテーマにしてねり合いを行った。
- これまで学んだことを根拠にして「栄えていくと思う」「すたれていくと思う」「これまで通り」等の意見が出てくると想定し、その理由を考えさせ、他の意見も参考に、どのように変容していくかを見取るようにした。
- 座席はコの字型にし、児童相互のやりとりの中で、自分の考えの深まりや広がりを実感させたいと考えた。
- 「ひろげる」では、金魚産業の持続・発展のため自分たちでできることを考えさせた。学んだことを伝える為にポスターを制作し、各教室に掲示してもらった。また、郡山市に誇りを持ってほしいと、お札を兼ねたムービー作りを提案した児童もおり、制作した。
- 評価については、ねり合いまでの段階で振り返りによる毎時間の評価を行った。振り返りを書くことで、誤った知識を習得していないかや、一人一人の思考の変容を見取ることができた。しかし、書くことが苦手な児童への評価は難しく、今後の評価の仕方への課題であると感じた。



分科会での提案の様子

【研究討議】

・この単元で何を学習させるかを考えると、郡山市「金魚産業」になったのでは。

↓郡山市の特色の一つである金魚産業を学ぶことで、特色をつかませたかった。金魚産業のこと、歴史、観光資源などの学習を通して、郡山市の特色をつかませたかった。

・本実践の「ねり合い」で児童の考えの変容が見られたのは具体的にどんな時か。

↓変容は「ゲストティーチャーが思いについて語った時」に揺れ動く児童が見られた。

【指導助言】

奈良県教育委員会事務局
学校教育課
指導主事 谷 聡 先生

○「特色ある地域のように」の進め方について

本単元は地域学習であり、産業学習にならないようにしてほしい。今回の実践では、問いを工夫して「郡山市は、なぜ『今も』金魚の町なのだろうか。」とすると歴史的配置も考えながら地域の学習になる。このように「なぜ今も金魚産業が盛んなのか」と考えさせると販売ルートはどうなっているのか、品種改良はどうしているの

か、と着目させていくことができず。そして問いの答えとして「郡山市では金魚産業がさかんである。なぜなら……」と書かせると4年生なりの言葉で答え、考えを深めることができるのではないかと考える。

○板書について

一時間の思考の流れが見えるようにすることが基本である。書き方としては、問い↓子どもたちと検証した予想↓検証した資料↓答え(まとめ)が基本である。またアレンジとして、真ん中に問いを書き、周りで図式化するという板書もある。

○社会参画について

より良い社会の形成に参画する資質や能力の基礎を養うことを目指す。つまり、子どもたちをすぐに社会に参画させるのではなく、これからの将来の社会に参画する基礎を養う。3年生や4年生の学習内容では身近なことが多く「自分たちでできること」は考えさせやすい。しかし、5年生の社会では「自分たちでできること」だけを考えさせると、難しい内容もある。このように「すぐに行動化する」は社会参画ではなく、これからの社会に参画する基礎を育てる考えで授業を展開すればよい。

(五條小学校 上田 智基)

第5年分科会

「わたしたちの食生活と食料生産米作りのさかんな地域」
「近年のごはん食のすずめから考える米作り」

明日香村立明日香小学校
教諭 中尾 創太

【本実践における提案】

本実践は、校区内にある「稲淵の棚田」や田植え体験、米生産者の方との出会いを中心に行った。また、米の生産者の米作りに対する思いや願いを自分事として捉え、日本の米作りを守ろうとする思いや、これからの米作りの発展について考えていこうとする態度が育つと考えた。

「みつめる」では、農林水産省の取組を活用することで、米作りに関わる人々の工夫や努力、課題に目を向けさせ、主体的に学習に取り組むことができた。

「しらべる」では、庄内平野の米作りを取り上げ、工夫や努力に着目させた。さらに、より生産者の思いに迫るために「棚田オーナー制度」と米作り体験を教材として扱い、学習を進めた。

「ふかめる」では、「ごはん食がすすめられたら、米作りの課題は解決するのだろうか」という問いについて話し合い。その後、「米作りの課題を解決するために、どのような取組をしていけばよいだろうか」というテーマで話し合いを行った。

「ひろげる」では、ポスターセッションを行った。児童は、これまでの学習で得た知識を使って、これからの米作りや棚田について選択・判断することができた。

【研究討議より】

・新学習指導要領も踏まえた内容であった。

・明日香村の棚田は、米作りで取り上げるべき教材なのか。国土の保全のところで入れてはどうか。

・棚田は時代と逆行しているものであるが、消費者と生産者のつながりを大切にするために取り上げた。

・「ふかめる」で、話し合っ

て児童が解決しないと考えた課題については、その後話し合いはしないのか。↓全体について考えたので、一つを深くは話し合っていない。

【指導助言】

下市町立下市小学校

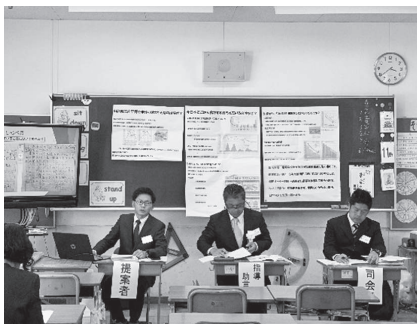
校長 鍵田 幸男先生

・導入での農林水産省サイトで米作りを推奨していることと、今児童が見ている現状とのちがいがから疑問をもつことができた。地域を見つめ直すという視点で、この学習に限らず、住む地域の現状とちがうとことがわかる資料があれば他の学習でも進められる。

・以前は、地域↓全国↓地域という流れで学習を行っており、地域にとどまりがちだったが、今回は全国↓地域の流れで良い進め方であった。

・学習の軌跡は、手間だが学習した流れが分かり、児童が次の学習について見通しができる。

・発表のし合いにはなっていたが、話し合いになる構成にはなっていない。今回は概略的に捉えたが、一つのことを考えていくことで、米のことを自分の課題として考えることができたのではないかと評価をいつ・どのように入れて



分科会での提案の様子

いくのかが大切である。指導と評価を一体化し、指導に活かしている。

・地図帳は、教科書と同じ重みがあるもの。場所だけでなく、土地の様子などでも活用をしていくべき。

(飛鳥小学校 前田明日香)

第6年分科会

「長く続いた戦争と人々の暮らし」

—我が国の移民政策から見つめる15年戦争—
奈良市立佐保川小学校
教諭 松好 健

【本実践における提案】

本実践では研究仮説を次のように設定した。「児童が、我が国の移民政策に対して疑問をもち、とりわけ満州の人たちが戦争に巻き込まれたことに気付くことから、戦争の経緯や国民への被害、我が国が多くの国々に多大な損害を与えたことを、資料や動画を見たり、当時満州で生活していた人の話を聞いたたりする中で、知識や概念を習得し、それらを生かして、「日本はこれからずっと戦争をしないのでいられるのだろうか。」をねり合うことで、よりよい社会の形成に参画する力が養われる。」

「みつめる」段階では、「日本の海外移住者数の変遷」のグラフを提示し、疑問を持たせ、満州に移住していた方に話を聞く中で、「長く続いた戦争はどのようなものだったのだろうか」という学習問題を立てた。

「しらべる」段階では、戦争が始まったきっかけや戦争の経過と広

がり、戦時下の国民の生活や子どもの生活、空襲や原爆・沖縄での地上戦から終戦を迎えるまで、と分けて調べ、Xチャートやクラゲチャートなどの思考ツールを使ってまとめた。また当時のすごろくで遊ぶことで、当時の子どもが気持ちに迫れるようにし、知識と自分たちの生活を結び付けられるようにした。子どもたちが調べてくのは、断片的なこと、それを見方・考え方を働かせるヒントを与えながら、どのようにまとめていくかを重視した。

「ふかめる」段階では、「日本はこれからずっと戦争をしないといられるだろうか。」と問い、改めて「戦争は絶対してはいけない」という思いを持った。中心概念に迫る発問として「日本がこれからもずっと戦争をしない・させないために、だれがどんなことをしなないといけないだろうか」ということを考えた。

「ひろげる」段階では、自分の人生設計をしながら、二度と戦争を起こさないために自分たちでできることを考え、平和についてはずっと考えていかなければいけない問題であることに気付かせた。

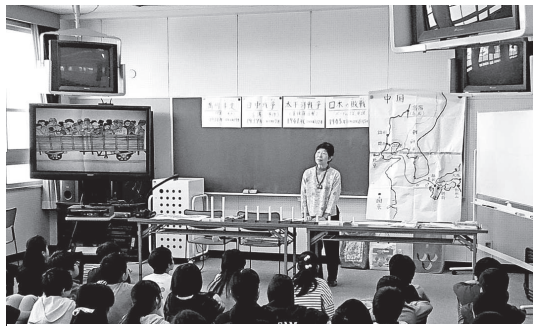
【研究討議】

・学習問題を立てるときの見通しの立て方はどのようにしているのか。

↓学習するにおいて学習する理由が大事。必ずゴールを設定する。新しい単元が始まったときには、どの教科でもゴールを設定し、見通しをもたせている。

・調べ学習の仕方意識していることは何か。

↓自分が用意したものがないと、授業に参加できない。まずはみんなと一緒に調べる。理想は予習だが、学校の実態もあるので一緒に



学習の様子

児童の既成概念を人々の営みにつなげることで、正しいことを本当のことに変えている。他人事から自分事に変えていった。

・社会的な見方・考え方を働かせることが新学習指導要領で明記されているが、構造的に説明されただけであり、これまでも社会科で大切にされてきたこと。

・自分の人生設計と並行させ、自分事として平和のために何ができるのかというものを考える取組を続けていくことで、時間的な視点もそだてることができると。

・すくろくやゲストティーチャーは他教科で行った。他教科との合科学習の在り方がこれから問われる。各教科の狙いははっきりさせることが大事。社会科は相互学習の経験で培ったことを生かせる。

・社会科は合科学習を進めやすい。総合の平和学習と似ているところもあるが、それぞれの狙いをはっきりさせながら、行うことが大事である。

・新指導要領は歴史を学ぶ意味を問うている。現在の自分たちの生活と、過去の出来事をもとに、現在および将来を考えるとある。本実践のねり合いはまさに、新指導要領に即したものである。

(六条小学校 大田 清美)

【指導助言】
桜井市立織田小学校
校長 半田 孝先生

・十五年戦争について、子供らが客観的に学び、それを自分の言葉で語り、明るく前向きに未来を考えようとしている姿が印象的である。

・戦後74年で、戦争体験者が少なくなってきた。満州に住んでいた方をゲストティーチャーに招き、話してもらえらるうちは、大いに活用したい。語り部の話を聞いた人が次に受け継いでいく必要がある時代に来た。

・既成概念を壊す資料を提示し、

実現を目指す子が育つ社会科学習である。三会場授業公開、実践発表が行われた。

岐阜県小社研は、四つのキーワード「自分」「見通し」「多角的」「選択・判断」を柱に、「子どもが社会とつながる授業」の具現に向けて実践されている。

私が参加した大垣市立東小学校では、「ひがしノート」という一人一人の学習の足跡を自分の言葉でしっかりと残させる独自のノート指導に、学校全体で取り組まれていた。このノート指導は大いに参考になった。

学年別研究協議会では、「市の様子の移り変わり」そのとき富雄が変わった!」の実践を報告した。本実践では、市がどのように移り変わってきたのかという学習問題を「土地利用」「公共施設」「交通」「人口の増減」「昔の生活の道具」の五つの視点で調査し、わかったことを短冊に書き、長さ十メートルの等尺年表へ貼っていった。年表を活用することによって、点として意識していた社会的現象が線として繋がりが、市の移り変わりが見えてきた。そして、地域の人々の願いにふれた後、作成した年表を手がかりに、児童が主人公となる未来について考えていくという実践であった。

参加者からは、「年表を等尺にすることで時間認識が育成されている」「年表から市の移り変わりが見えてきている」などの意見が出され、この単元での年表の重要性が明確になった。

本実践では奈良市内の4つの地域を取り上げ、市全体の移り変わりを見ようとした。児童の空間認識の実態や地域の実態などから、市全体の移り変わりを対象とする

この困難さについて議論が盛り上がった。来年度から学習することになる新しい内容だけに、関心の高さが感じられた。

指導の山田均先生から、児童が地域の社会的現象を自分事と捉えたり、人々の思いや願いを考えたりすることで社会とのつながりを意識するようになる。こうした地域の主人公としての意識を涵養することの重要性を「シビックプライド」という概念に絡めて指導していただいた。

この実践報告で得た学びをこれから授業の中で大切にしていきたい。

第66回近畿小学校教科教育協議会・滋賀大会に参加して
檀原市立晩成小学校
教諭 本多 俊道

近畿小学校教科教育協議会が滋賀県近江八幡市立老蘇小学校で開催された。大会主題は、「社会と主体的に関わり、新たな自分と迫る社会科学習」を知りたい!関わりたい!があふれる授業へ」である。

滋賀県小学校教育研究会社会科部会では、今年の研究仮説を「学習問題を生かし、発展的な出口を見据えた単元計画を立て、課題解決に見合ったまとめ方の工夫をすれば、学んだことを生かし、『新たな自分』に迫ることができよう。と設定している。子どもが社会科を通して、新たな自分を深める」「学んだことを生かそうとする」場面を位置づける。最終的に、自分が社会とのつながりに気付く。さらに、自分が社会に対してできることを考えようとする。

三年の授業では、近江八幡で作られている安土信長ねぎのよさを考えるために、安土信長ねぎと普段見かける白ねぎを一人ずつに配り、実際に触ったり、見たりすることで相違点を見つけ学習問題を自分たちでもつことができていた。また、四年では、自然災害の単元で授業が行われていた。近江八幡の水害の歴史・被害・原因を知ること、問いをもち、現在の近江八幡での水害に対する取組について学びを深めた後、学んだことを生かそうとする場面の授業であった。ゲストティーチャーとして来てくださった地域の方の話を聞き、自助だけでなく共助の大切さについて考えられる内容であった。

学年別研究協議会では、奈良県小社研五年部会の提案として「わたしたちの食生活と食料生産 米作り」のさかんな地域——米作りゼ口地域から米作りを考える——の実践報告をした。参加者からは、関連図や「ひろげる」段階で行ったお米パンフレットについての質問があった。

指導助言の二階堂小学校北野博康校長先生からは、ノート、関連図、パンフレット作りなど、丁寧に子どもたちのふり返りを見取られていたことなどの指導をいただいた。

記念講演では、文部科学省調査官小倉勝登先生が「新指導要領と社会科のこれから」授業づくりの工夫と評価の在り方」と題し、新指導要領の見方や観別学習状況の評価について講演された。

全国近畿大会に参加して
第57回全国小学校教科教育協議会・岐阜大会に参加して
奈良市立佐保小学校
教諭 田中 雅代

全国小社研・岐阜大会に参加した。大会主題は「よりよい社会の